

二級へ 茨木義雄

一級へ 富澤康吉、中林久良、徳田 實

○十一月十一日附進級

二級へ 淺見 勇、星子義臣

○十二月一日の進級

二級へ 矢野進一郎

一級へ 青木俊一、土志田孝之助

三二 昭和三年史

(一) 寒 稽 古

一月十四日より二月三日迄三週間毎朝午前四時半より例年の通り綱町道場に於て寒稽古を舉行す。出席人員百三十名。皆勤者は八十餘名にして、其内精勤者四名には特に三田柔友會寄贈柔の友賞及び精勤賞を贈呈した。尙本年は左記の如く先輩の出席者多く、現部員に尠からざる刺戟を興へ。殊に終了式には林塾長親しく御臨席になり、一同を激勵せられたのは、誠に空前のことであつた。

先輩出席者は峰岸、阿部(大)、阿部(英)、阿部(秀)、尾上、葉山、塚本(福)、岡安、野尻、木村、阿藤、五島、松本、

島、飯塚(茂)、福澤(駒)、野田、丸井、小林、岩崎、小林、中川、菅原、三村の諸氏であつた。

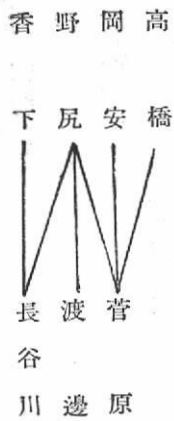
(二) 卒業生送別紅白勝負

附、先輩對現部員試合

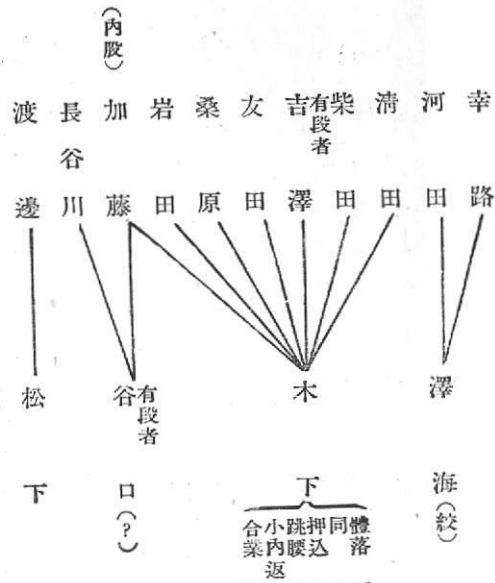
二月十九日午前九時より例年の通り卒業生送別紅白勝負あり、之に續いて行はれた先輩對現部員精銳の接戦は、異例でもあり、又頗る盛大であつた。先づ現部員の紅白勝負を舉ぐれば



先輩對現部員試合



(先輩) (部員)



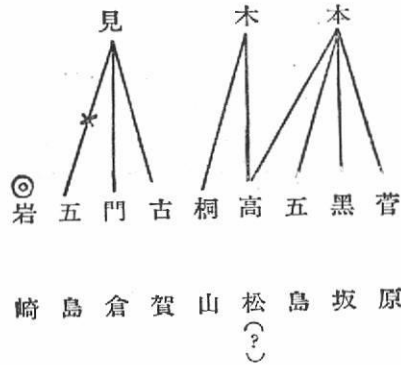
(同大外)

(合業)

(跳同押腰込)



五九三



崎島倉賀山松島坂原

八人掛



四段中



本

- 初段友
- 同 桑
- 同 岩
- 同 谷
- 同 吉
- 二段加
- 同 松
- 同 菅

七人掛

四段 蟻



木

- 二段松
- 同 吉
- 同 岩
- 同 桑
- 初段友
- 同 菅

菅加

原藤

下(大外)

澤(逆)

田(内股)

原(小外)

田(拂腰)

原(大外)

下(跳卷)

藤(逆)

澤(押込)

口(大外)

田(押込)

原(逆)

田(絞)

倉

木

賀

十人掛

五段 淺



見

- 高
- 五
- 黑
- 菅
- 松
- 加
- 谷
- 岩
- 桑
- 友

阿部(英)



松(○?)

島(内股)

坂(大外)

原(内股返)

下(跳腰)

藤(内股)

口(大外)

田(大外)

原(小外)

田(跳腰)

見 崎 島

右終了後六本木『ときわ』に於て送別會開催。先輩出席者は飯塚師範、中野師範助手の外吉武、盛田、岡安、峰岸、阿部(大)、阿部(芳)、阿部(秀)、山岡、高橋(吉)、松田、野尻の諸氏であつた。

本年度卒業生

淺見淺一(五段)、蜷木敏夫(四段)、中本吾一(四段)、長谷川繼彌(三段)、渡邊二雄(二段)、鈴木實(三段)、榛葉達彌(三段)、佐藤龜之助(二段)、村上勇(二段)、樹下光男(初段)、大野俊文(初段)、柴田幸一(一級)

(三) 新入部員歡迎紅白勝負

五月十三日

(紅)

磯 乳 田 大 石

部 井 村 瀧 塚

菅 伊 神 阿 神 峰

生 藤 田 部 戸 岸

(白)

鈴 田 廣 木 新

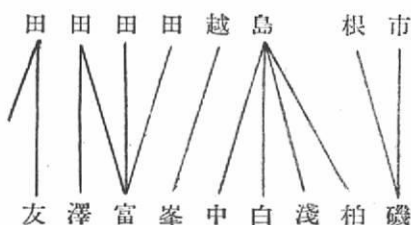
木 室 田 村 堀

相 金 中 松 鈴

澤 羽 村 崎 木

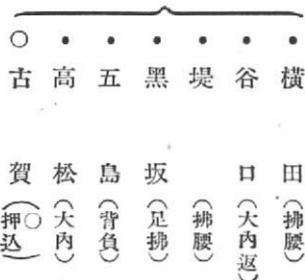
七人掛

横 富 清 岸 村 五 關 大

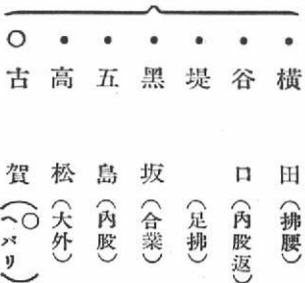


田 海 澤 岸 野 石 見 原 部

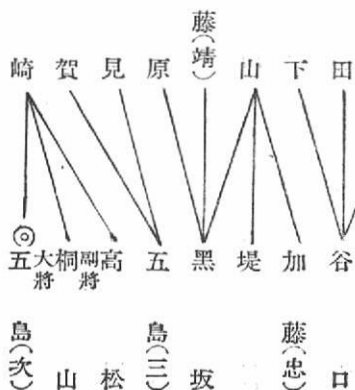
五段 阿部 大 六



五段 阿部 英 兒



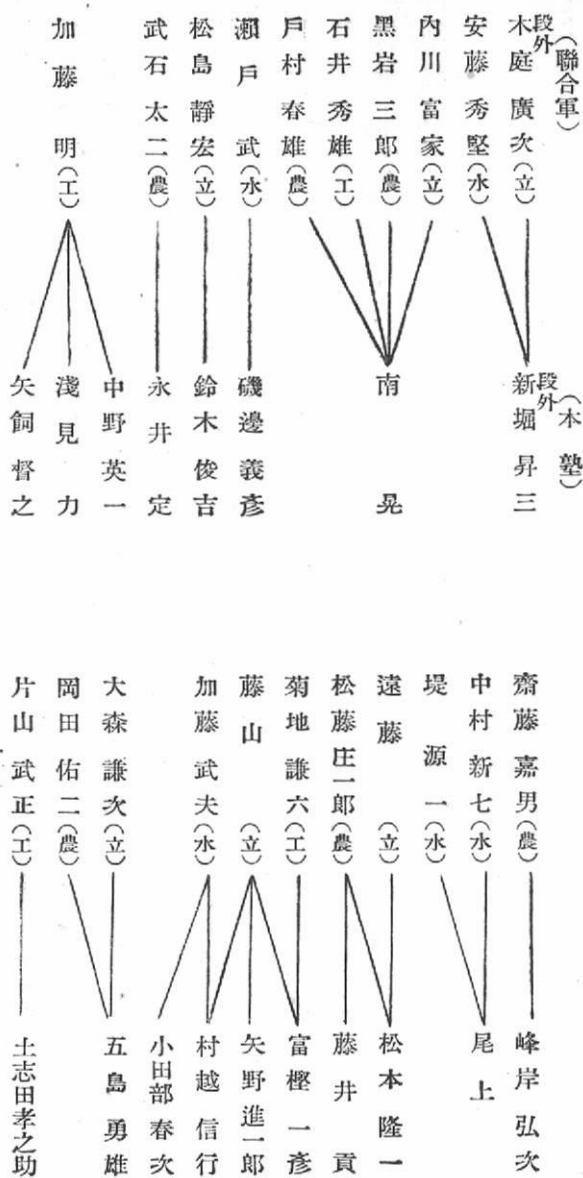
岩 大 古 副 淺 菅 加 龜 木 德

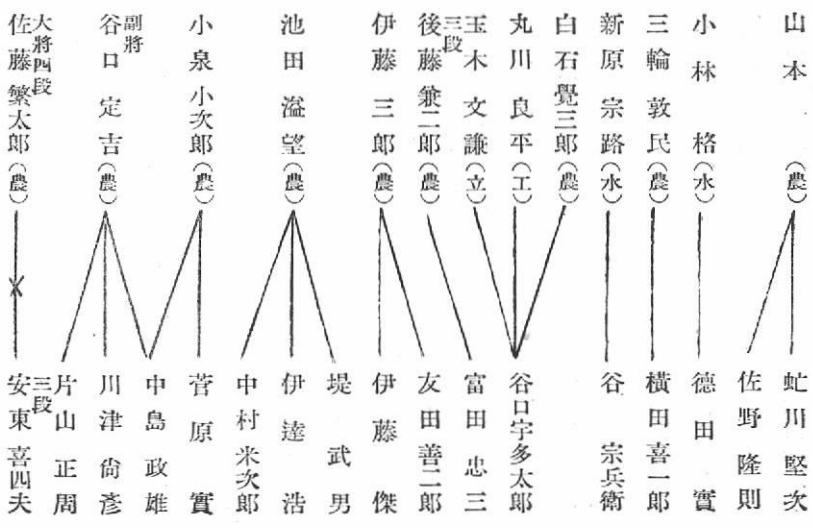
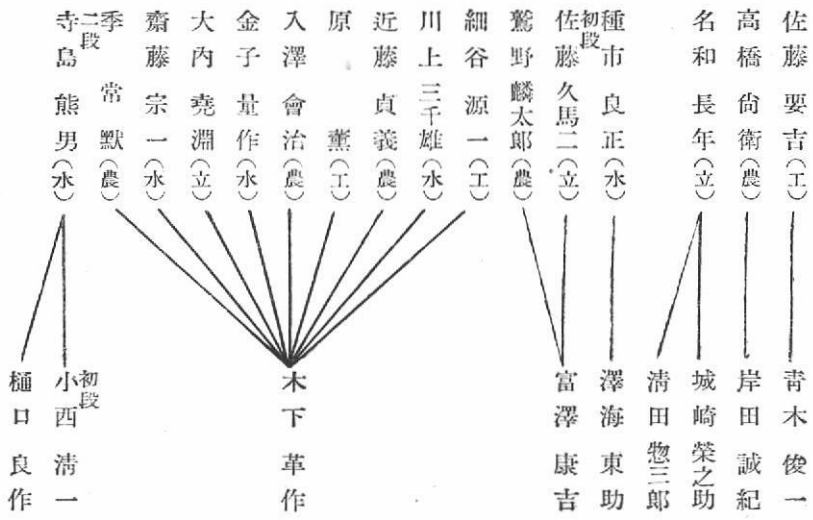


五九六

(四) 對四校聯合勝負

舉行月日不詳なれども例年の如く六月頃ならん。双方各五十名。塾方の中堅木下、敵の八人を續けさまに討ち取りて偉功を樹て、遂に我が軍の大捷に了つた。





高松 徳藏
 黒坂 義衛
 浅見 勇

副將 五島 三雄
 大將 四段 古賀 徹

(五) 第三十八回大會

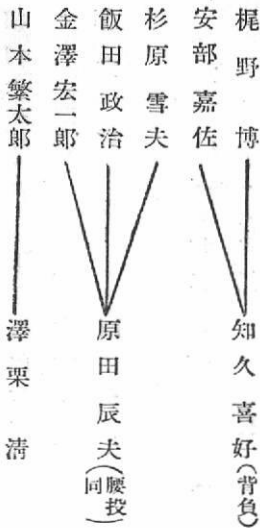
附、水産講習所對豫科試合

十月二十七日舉行。今回は秋の慶早戦を控へたることゝて、前例を破りて各學校の招待を止め、之に代へて水産講習所對豫科の紅白勝負を行つた。其他は例年の如く幼年組及び成年組紅白勝負に次いで、普通部對商工部試合があつた。

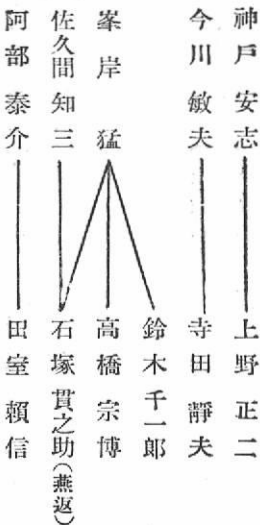
普通部對商工部試合

(普通部)

(商工部)

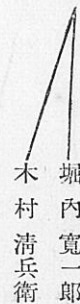


(送襟内股)



(大外)

相羽良次郎

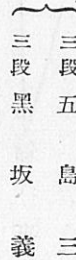


藤井貢



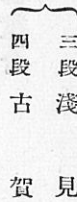
形

投之形



雄衛

極之形

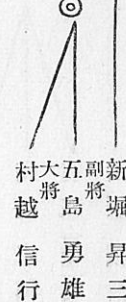


徹勇

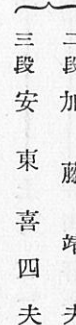
(崩四方)

副將 磯邊 渡邊

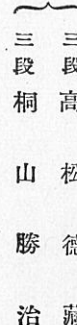
義彦



固之形



五之形



水産講習所对本塾豫科試合

(水産)

(本塾)

堤操一

加藤武男

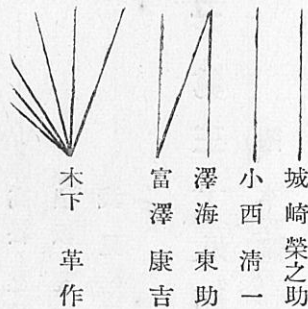
鈴木薫

中村新七

安藤專賢

高田啓次

伊澤義一郎



木村喜次郎

瀬戸武

種市良正

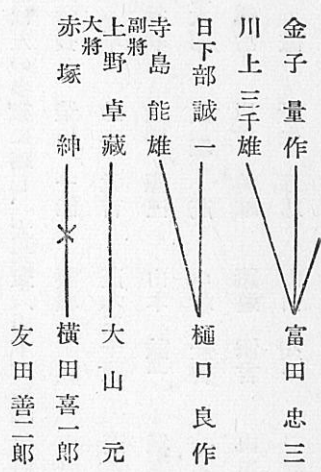
齋藤宗一

小林格

井上彌太郎

小川義一





伊藤 傑
谷口宇多太郎
杉山 嘉雄
龜山 俊衛
副將 加藤 靖夫
大將 菅原 實

(六) 第一回對早高試合

昨年末より慶早兩大學柔道部幹事の間に交渉が進みつゝあつた本塾豫科高等部と早稻田高等(第二)學院との對抗試合の第一回は、時事新報社並に報知新聞社後援の下に、十一月十八日午後二時半より戸山學校道場に於て、六段小田常胤氏審判の下に舉行された。この慶早戦は、從來の兩大學の關係より見て、多大の興味を唆る試合であつたので、觀覽席は斯界の大家連によつて占められ、殆ど立錐の地なき程の盛大であつた。試合の詳細は次項中村氏の見物記に在り、勝負の決したるもの僅に四組、本塾は大將五島氏を残して優勝した。(口繪參照)



谷 宗兵衛 赤山 政治

二段 高浪 忠八郎 根本 實

大山 元 吉田 啓(釣込足)

杉山 嘉雄 前田 貞一

木下 革作 泉 忠保

龜山 俊衛 天野 三雄

(釣込足)横田喜一郎 長澤 義弘

加藤 靖夫 伊勢 治(内股)

(押込)富田 忠三 二段 小椋 菊壽

片山 正周 伊勢 治(内股)

(大内刈)伊藤 傑 田中 榮三郎

副將 安東 喜四夫 尾崎 西郷

谷口宇多太郎 船越 茂

大將 黒坂 義衛 八田 一郎

坂口 太郎

五島 三雄◎

試合後、豫て用意の四谷三河屋に集合、一同前記兩新聞社寄贈の大『カツプ』にて乾杯し、刻々と昂まる熱は彌々上りて選手の顔は灯に映え、果ては演説を始むるもの、感泣するものありて、殆んど興の盡くる所を知らなかつた。

尚出席は左の多數に達し、大先輩(山下師範時代の)及び柔友會員よりの多額の寄附もあつた。(順序不同)

青木 會長 柴田 一能 飯塚 師範 中野 師範 松尾恒四郎 中村 愛作 吉武 吉雄 菅原 浩

菅原 卓 鈴木 元吉 茂木三千藏 茂木信太郎 淺見 淺一 島 泰次郎 岩崎清一郎 阿部 芳郎

阿部 秀助 近岡 源三 山本 誠一 塚本福治郎 宮永金太郎 安藤徳太郎 小原 勝守 福田與三郎

松本篤太郎 飯塚 茂 中村 壯吉 鈴木伊兵衛 阿部 英兒 中野榮三郎 小口 清美 木村喜八郎

峯岸 鎮治 川村 美雄 諸遊 慎吉 山田潤次郎 岡本養之助 荒井 健 清水 耕作 岡 善次

谷岡 謙 針生 五郎 山田 久一 三村徳五郎 西村 襄 小林猪四郎 山岡吉之助 宮澤 衛

長谷川繼彌 齋藤 一 櫻井 督三 葉山健二郎 外學生四十名 計九十二名

(七) 慶早豫科試合見物記

中 村 愛 作

久方振りに好きな柔道の大勝負を拜見し、而も其結果は、大將を殘して我軍の大勝に歸したと云ふのだから、實に愉快に堪へない。深く選手諸君の勞を多とすると共に、飯塚、中野兩師範の丹誠と、幹事並に柔友會世話人諸氏の御盡力を感謝する次第である。

元來柔道の試合と言ふものは、甚だ神聖なるものであることは申す迄もないが、此慶早の試合は特に歴史を持つもので又格別な意味を有するものである。兩校が私立大學の双壁であると云ふ許りでなく、慶早の試合と云ふものは從來各種の競技に互りて度々行はれたのであるが、丁度明治四十年の頃と思ふ、野球試合を中心として兩校の意氣最も白熱化して、遂に一時中止するの已むなきに至り、其後最近になつて漸く之を復活するに至つたもので、丁度英國に於ける「ケムブリッジ」「オックスフォード」兩大學の試合、米國に於ける「ハーバード」「エール」兩大學の勝負の如く、其強弱に拘はらず最も世間の興味を惹き、又本人同志も氣の乗る試合で有つて、外の試合には全部負けても、之丈は勝たなければならぬと云ふ意味深長の大試合である。

話は少々横道に外れるが、私は元來學生の徳育なるものは、運動競技に依て始めて現はるべきもので、同時に之が爲めには歴史の附隨することが必要であると云ふことを主張するものである。我大和魂が三千年の日本の歴史により涵養されたと同じ様に、強き精神を築き上げると云ふことには、何としても歴史が必要であると考へて居るものである。同時に又

精神を錬ると云ふことに付て、昔は白刃の下を潜らなければ一人前ではないと云はれたもので、之は想像して見ても、成程度々白刃の下を潜つたものは精神が錬れて居り、落ち付て居るであらうと思はれるが、之は今日に於て行はれないことで、白刃の下を潜るなど云ふことはやつて見ることが出来ない。さりとて斯の如き鍛錬は到底教室の講釋などで得らるべきものでない。そこで今日白刃の下を潜るに最も近きことをするのは何であるかと云ふと、大勝負に度々出會ふと云ふことである。現に我々が初めて勝負に出たときには、始終何をして居たか自分にも判らぬ位である。然るに其度數が重なるにつれ、勝負最中に敵勢を察し種々に策戦工夫を凝す様になる。之は落付が出て來て心に餘裕を生ずるに至つた證據で、所謂「水鳥の足はせわしく働けど心靜かに遊ぶ荒波」と云ふ心事の妙味は茲に得らるゝのである。此意味に於て私は、大試合と云ふものの非常に價値多き事を信ずるものである。以上の二斷案を前提として、私は思出多き此慶早兩校の間に、過去の歴史に溢るゝ柔道の試合をすると云ふことの、意義頗る重大であることを考へるのである。

私は無論當日勝負を見物し、且つ熱心に拜見を致しました。甚だ烏滸がましい次第であるが、各勝負に付き私の見たままの感じを書き連ねて見度いと考へる。實は初めほんの自分の思出の爲めにと思つて書き始めたのであるが、或考へよりの御一統の御覽に入れることゝした。何等かの御参考ともならば望外の幸に存する次第である。

(一) 樋口—松本 樋口君頻りと左手で敵の帯を取て左小内刈を掛けたが、この帯を取ることとはどうかと思つた。小内刈に帯を取るとは、餘り効能なくして徒に敵に要心をせしむる結果となりはしないかと思ふ。之は矢張袖を取つて掛ける方遙に得策ではないかと考へた。

(二) 城崎—彦坂 城崎君非常に優勢で有つたが、早軍甚だずるく、殆ど戰意絶無とも云ふべく、終始袖を振切るのみで取らせない、一寸手の出し様がないと云ふ有様で有つたが、城崎君としては敵が無理に袖を切る際に生ずべき隙に乘ずる工夫をしたらばと思はれた。

(三) 佐野—田崎 佐野君の態度好し、誠に攻勢に出た好勝負で有つた。然し寢業で遂に取り得なかつたのは惜しい。足に充分かぢり付く機會は度々有つた様に思つた。

(四) 富澤—三輪 立上つて双方とも餘り活動がなかつた様なので、筆者便所に立つた爲め、充分に見なかつたのは誠に申譯ない。

(五) 友田—杉本 友田君優勢で有つたが敵の右腰投には冷々させられた。筆者許りではない、近所の見物が椅子から滑り損なつたものも少なくなかつた。左手を早く腰に下ろすこと必要と思ふ。又君の右足拂中々有効で、二三度行つたかと思はず聲を發したことも有つたが、何分右手が敵の襟にあるので効能が薄い。あの場合右手が袖に有たらきつと取れて居たと思ふ。

(六) 谷—赤山 谷君元氣盛なれども、幾分體力の足らない感もある。双方自重、評なし。

(七) 大山—吉田 大山君優勢で有つたが、餘り焦り過ぎたると體が固く成つて居た爲め、無理な引廻しにつけ込まれて横捨身に取られたのは諦め切れないであらう。然し之は誠に好き經驗で、勝負の効能はこゝにある。一同の心すべき所であると思ふ。

(八) 木下—吉田 此勝負は當日での好勝負であると思つた。敵も一人倒した餘勢を以て我軍の大戦鬪艦に向つて、中々攻勢に戦を挑んで来る。木下君も固よりこゝで一と働をしようと思ふのだから堂々と敵を攻める、双方立派な立合で有つた。極まり業の足拂も美事で有つた。木下君大志を抱き乍ら焦らなかつた所は好い。

(九) 木下—泉 敵の態度は綺麗とは云はれなかつた。逃げ専門で有つたので、大望を抱く木下は餘り攻め過ぎて敵の小外刈に引つかゝつたときは、實に我々見物は三斗の冷水を浴びせられた氣持がした。此引分は仕方あるまい。

(十) 横田—長澤 横田君の右跳腰一寸有効であつたが、本來君は體落の方が得意と聞て居る。此場合には特に體落の

方が適當で有つたと思ふ。右手深く袖を取つて居るので、敵の左體落には冷々させられた。殊に隅に行つて君の廻り鼻をかける敵の策戦は中々巧妙な所が有つた。其落ち付は學ぶべき所と思ふ。

(十一) 富田―小椋 富田君の要領甚だ好し、用心しつゝ堂々と敵を攻め敵を破つた態度は大に我意を得た。

(十二) 富田―土倉 之も中々の激戦で富田君は一人破つた餘勢を以て敵に肉薄し、先方も二段の威嚴を以て大に戦ひ努めたが、何れかと云へば富田君優勢に引分と成つたのは當日での好勝負で有つた。

(十三) 伊藤―田中 段は一段違ひだが歩合は五角と見た。好い勝負で有つたが、少々力が這入り過ぎた感があつた。寧ろ思切つて一方力を抜いて取つて見たら好かつたかと思つた。

(十四) 谷口―船越 谷口君の大外刈美事で有つた。勝負の要領甚だ氣に入つた。

(十五) 谷口―坂口 谷口君又々優勢で敵の寢業の相手にならず軽く逃げて居た所極めて好し。小外刈で確に一本取つて居たのを、審判が後ろに居た爲め認められなかつたのは残念で有つた。然し堂々と優勢に二段二人を引受けたのは殊勳に値する。

(十六) 高波―根本 高波君體力負けをして居た。守勢引分も止むを得まい。

(十七) 杉山―前田 杉山君中々思切つた所が出て好かつた。殊に左の膝車は有効に見へたが、左手が敵の襟にあるので利かない。殊に膝車が幾分押氣味であるので効き目が薄い、左手を袖に落す工夫が必要と思ふ。敵の體勢から見て右拂腰が行つたらと思つた。岩崎三郎君の拂腰を思出させた。

(十八) 龜山―天野 勝負は此邊から非常に殺氣立つて來た。龜山君度々敵に嘯付かれた様で審判に訴へて居たが、元來敵の引分主義の寢業に相手に成つたのがつまらないと思ふ。君は二三度押へ込まれた。其都度體力を利用して起きるには起きたが、之は時間つぶしと體力の徒勞でつまらぬと思ふ。谷口君の式で相手にせず立つて投げたら好かつたと思ふ。

(十九) 加藤―伊勢 敵の伊勢君中々しつかりして、殊に態度も堂々たるもので、加藤君には少し強敵で有つた様に見られた。加藤君が終始寢業に出た策戦は亦損でも有る様に思つた。跳腰に取られたのは已むを得ないとしても、終り頃に一寸立つて戦つたあの流儀で、兎も角立つて兩手を遊ばせ常に敵の掛け業に備へ乍ら守勢に戦つた方が好かつたと思ふ。あの様な守勢では、徒に相手につけ込まれるのみで名實共に損であると思つた。同じ守勢でも敵軍の彦坂君の守勢の方が得策であると思ふ。

(二十) 片山―伊勢 伊勢君は中々の剛の者と見へ、又堂々と攻め込んで來た。片山君中々の苦戦の様で蟹挾を連發したが、初の一回は兎も角あとは効能がない様で有つた。守勢引分も仕方がなかつたであらう。

(二十一) 安東―尾崎 尾崎君は敵軍中での強は者と聞いた。安東君も寢業では聞へた勇者だが、體力の相違は致方なからんも、今少し立つての研究も必要なるべく、又寢業でも今少し攻撃を見せて貰ひ度かつた。

(二十二) 黒坂―八田 大將副將の取組とて、多少消極的に流るゝも已むを得なからんも、黒坂君なれば立つて堂々の戦を挑んで充分見込あると思ふ。自重も必要であるが、もつと戦つても好いと思つた。大内刈返しは好い所が有つた。

以上妄評誠に多謝、少々時勢後の評であるかも知れぬが、總評として私の尙ほ一言云ひ度いのは、勝負が少々當世風に成つた様な感じがしたことである。勝つ確信のない勝負は負けなない工夫をし、又全體の勝敗に付き強ひて勝つ必要のない場合には自重すると云ふのが原則であるらしい。策戦とか『チーム・ワーク』とか云ふ點から云へば、誠に結構なことであるとも云へるが、私は柔道の勝負を以て一の『ゲーム』とは心得へて居ない。武士道より出た一の國技と認めて居る。従つて餘り打算的に行くのは果して如何かと考へて居る。殊に學生の試合としては考へ物と思ふ。將棋を指す場合に素人の間には待駒をしないといふ不文律がある。私は規則には觸れなくとも待駒は嫌ひだ。本當か虚か知らぬが昔荒木又右衛門が伊賀の上野で三十何人か劍術の名人を斬つた時に、若し三十何人が一度にかゝつて來たら、如何に荒木と雖も敵

し得なかつたと云ふことだ。然るに其三十何人は各一流の名人で有つたので、其名を惜み、見す／＼一度に行けば勝てるのを知り乍ら、一人一人かゝつて遂に皆斬られてしまつたのだ。命がけの際でさへ左様で有つたのだ。之は策戦とか「チーム・ワーク」とか云ふ點から見れば、實に愚の骨頂である。然しそこに又甚だ面白い所があると思ふ。私は斯様な馬鹿なことを今日要求するものでは固よりない。然し斯様なことより出發した我武道には、幾分斯様の氣持を持つて居り度いと思ふ。相手が強打者であれば、無理に之と戦はずに四球で送るとか、既に勝つて居る「ゲーム」なれば絶対に無理をしないとか云ふ策戰的の妙味は、柔道には或程度にして貰ひ度いと思ふのである。綺麗に勝つと云ふことは何の競技にも理想であるが、殊に柔道には此「綺麗に」と云ふ所に餘計の重大味を加へ度く思ふのである。私共は「綺麗に」負けた澤山の經驗を持つて居るのである。然し負け惜みで云ふのではないが、キタナクとも勝てば好かつたと思つたことは一度もない。其爲めには堂々と敵を威嚇しつゝ守勢を取ることの研究を希望するのである。

右の如く申した所で、私は固より此度の勝負を非難するものではない。私の批評は近頃の試合を總括的に云つて居るのである。今回の試合の如きは近頃の勝負中で最も美しい勝負中の一で有つたと思ふ。然し世間が左様であると思ふても、我々も左様で好いとは云ふてはいけない。我々は天下の柔道を指導する責務を持つて居る、事實今日迄此責務を盡して來たと自信して居る。願くはもし私の此立論に御同意下さるならば、是非此意味に御盡力を下さらんことを切望に堪へない。當初にも申した通り、私は慶早柔道試合と云ふものを甚だ重大視して居る。何としても之を永續させるは勿論、更に全校「ベスト・チーム」の試合も開始して、永く續けて行き度いと熱望する。大きく云へば國家の爲め之を決行し度いと考へて居る次第であるから、一同此意氣で勝敗は第二として大に自重努力をし度いと考へる。

夫れに付て私の大に感じたのは、先づ選手が互に物を云ふことを嚴禁し度い。「立て」とか「こつちへ出ろ」とか云ふのは甚だ聞苦しい。又援軍も拍手にシツカリ位より外應援を禁ずることも必要であると思ふ。餘り白熱すると又中止の已む

なきに至ると考へる、大に自重を望む次第である。

最後に一言し度いのは、之は歸途友人に聞いた話だが、解散してから早軍の應援隊の數名が、一人の早稻田學生を捕へて其應援が餘り猛烈で有つたことを頻りに詰つて居たさうで、其學生は大に陳謝し、且つ辯解して居たさうである。又筆者が歸途省線電車に乗つた所が、丁度乗合せたのが早軍の八田主將であると思ふ（或は違つて居るかも知れぬ）、友人と熱心に今日の勝負の話をして居る内に曰く「相手も流石は副將だ、よくねばりやがつてどうしても取れなかつた」誠にならぬ氣な云ひ方だが心中甚だ光風明月の如く見られ、非常に好い氣持で有つた。早稻田は好い相手であると思ふ。是非斯道爲め、又國家の爲め、御互に自重し努力し、此試合を世間の一大行事とする様に發展させようではないか。

(八) 雜記

普通部及商工部々員の遠征

普通部柔道部信州遠征

本年一月八日信州遠征の途に上り左の如き成績を以て各地に轉戦せり。

○九日 選手各十二名 普通部(勝) || 諏訪中(負) 慶普大將を殘す。

○十日 選手各十四名 普通部(分) || 伊那中(分)

○十一日 選手各十名 普通部(負) || 松本一中(勝) 松本側大將を殘す。

○十二日 選手各十名 普通部(負) || 長野商(勝) 長野側大將を殘す。

○十三日 選手各十名 普通部(負) || 上田中(勝) 上田側大將、副將を殘す。

商工部宇都宮遠征成績

- 一月廿一日 各八名 商工部(負) || 縣立商業(勝) 双方大將相見ゆ。
- 廿二日(午前) 各十一名 商工部(負) || 宇都中(勝) 宇都中三將を残す。
- 廿二日(午後) 各十名 商工部(分) || 宇都師(分)
- 廿三日(午後) 各十一名 商工部(勝) || 安蘇澤道場(負) 双方大將相見ゆ。
- 廿三日(午後) 各十一名 商工部(負) || 足利青年(勝) 足利側大將副將残る。

幹事新任

淺見淺一氏卒業につき、高松徳藏氏(三段)新幹事として推薦された。

野田醬油道場開

野田醬油株式會社に柔道々場新築落成せるにつき、六月十七日慶應柔道部及び柔友會員有志十數名其道場開に出場した。

葉山合宿

例年の通り部員三十五名は七月十一日より廿三日迄葉山に合宿、折柄來葉中なりし早大柔道部員との間に慶早柔道試合(但し豫科對高等學院)の議起る。

塚本太作、小山内信兩氏送別會

大日本製糖會社員塚本太作氏の臺灣斗六工場長として、又三菱銀行員小山内信氏の印度へ夫々轉任を機とし、九月十九

日午後六時より丸の内東京會館に於て送別會開催、島幹事の挨拶の後、塚本、小山内二氏の謝辭あり、盛會裡に九時半散會。出席者左の如し。

塚本 太作	小山内 信	(以上來賓)	青木 徹二	飯塚國三郎	中村 愛作	内海 勝二	湯本芳三郎
守谷 正毅	鈴木伊兵衛	峯岸 鎮治	齋藤 義臣	近岡 源三	高橋 貞作	阿部 大六	阿部 英兒
安藤徳太郎	鈴木 正一	岡 善次	松本篤太郎	菅原 浩	菅原 卓	東野 衛	庄野 英樹
塚本福治郎	中野榮三郎	野田市太郎	柳井 松祐	小林武次郎	出口 修二	島 泰次郎	阿部 秀助
三村徳五郎	岩崎清一郎	葉山健二郎	尾上 繁二				

進 級 一 括

○五月十三日進級

二級へ 磯邊義彦、鈴木俊吉

一級へ 五島勇雄、村越信行、中野英一、峯岸弘次

○六月四日附進級

二級へ 南 晃、新堀昇三、永井 定

一級へ 城崎榮之助、小田部春次

○十月二十八日進級

二級へ 中村仙一郎

一級へ 新堀昇三

(九) 三田柔友會記事

柔友會委員會及其他の會合

○一月廿三日慶應俱樂部に於て柔友會委員會を開催。

出席者

峯岸鎮治、徳永秀夫、尾上繁二、葉山健二郎、岡善次、木村喜八郎、菅原浩、阿部芳郎、小原勝守
五島次雄(現部員)

左の事項につき報告及打合をなせり。

一、關西方面會費徵集の件

峯岸氏大阪出張の際同地柔友會員との會談の様様につき報告あり、關西方面在任柔友會員勸誘及び會費徵集につき、大阪方に御願する事に諒解を得たり。

二、委員中にて會計事務を處理するの件

從來會費徵集及び其他の事務一切を委員監督の下に學生に依囑しありたれど、學業其他の關係上迷惑も一通りならず、當然柔友會委員中にて處理すべきものなりとし、會計事務を菅原、木村兩氏を煩はして専ら其任に當る事とす。

三、寒稽古精勤者に柔友賞贈呈の件

寒稽古獎勵のため柔友賞として金參拾圓也を支出する事に決し、賞品及び人選は現柔道部幹事に一任せり。尙柔友賞として『トロフィー』作製の議起りたるも、之れが寄贈實行は他日の機會に譲る事とせり。

四、師範に對する謝禮の件

柔友會收入金の用途に付きてはその大部分は師範への謝禮其他雜費に費やされ、直接柔道部への後援費としての支出の僅少ななる點は、從來も屢々問題となり誠に遺憾に堪へず。これが對策として此際新會員の勧誘に努むると共に、師範の増給に付き塾當局者に諒解を得る事に努力する事を協議せり。

五、慶早試合の件

五島現幹事より今秋頃慶早試合の希望あり、討議の結果異議なく賛成す。但し事は柔道部の奨励にあるが故に、今回一回にて止むる事なき様、且つ眞面目に通學せる學生たる事を條件とすべしとの注文あり、尙一應青木會長の承諾を求むると同時に、飯塚師範に對しては先輩中より諒解を得る事とす。

六、監督選任の件

愈慶早試合の協議らば、監督者を先輩中より專任する事とす。

七、柔友會總會の件

柔友會總會は來る三、四月頃催す事。

○三月廿八日午後五時より慶應クラブに於て開催。柔道部有段者の新入學に關し峯岸氏より報告あり、今後の方策につき協議する所ありたり。

出席者 峯岸、徳永、尾上、岡、葉山、菅原、五島

○五月七日午後六時より築地寶家に於て柔友會總會開催。峯岸氏より會計經過並に近況に關する報告の後、本年度委員の推薦あり。席上慶早柔道試合（五島氏報告次項参照）話題となり、先輩よりは之れが實行につき大いに激勵の辭出で、今一應選手會に於て協議する事となりて盛會裡に十一時散會せり。

出席者は青木、飯塚、中村愛、湯本、鈴木、香下、谷岡、中村壯、峯岸、岩崎、東野、庄野、近岡、小林、野田、阿部英、阿部大、阿部秀、松本、三村、竹内、尾上、岡、小原、丸井、菅原、葉山、五島、岩崎、高松の諸氏で、本年度の東京委員は左の如く決定。

島泰次郎、岩崎清一郎、阿部秀助、三村徳五郎、尾上繁二、葉山健二郎

慶早柔道試合交渉経過に就て（五月七日五島氏報告）

昭和二年十二月末早大幹事二名と會見せる際、昭和三年頃より對抗勝負を始めては如何との談合あり、夫れ々、選手會を開き相談の上返事する事に定めその儘別る。（昭和二年一月一度此の話ありしも實行とならず保留となる。）

昭和三年一月廿日萬來舎に選手會開催、種々討議あり、採決の結果一名の反對者ありしのみにて大多數の賛成を得、實行に決定、飯塚師範より激勵の辭あり。

二月二日早大幹事五名、當部幹事五名にて會見、種々打合をなし、大略の協定を見たるも、只人數の點のみにて妥協つかず、双方再考の上返事する事とせり（早大申出人員最低廿人當部最高十七人）、其後屢々交渉を重ねたるも、遂に協定を見るに到らずして結局物別れとなれり。

○五月廿三日慶應俱樂部に於て新舊委員會開催、事務引繼と共に新委員の役割を定む。

出席者 峯岸、島、尾上、岩崎、葉山、三村、阿部（秀）

○五月卅一日吉武吉雄氏の上京を機とし丸の内竹葉に於て委員の懇談會を開き、今後の方針につき懇談する所ありたり。

○七月卅日慶應俱樂部に於て委員會開催、中學校選拔柔道試合舉行方につき現部員より提案あり、之れが可否につき意見の交換をなせり。

○三田柔友會關西支部設立の件

年々會員の増加するにつれ會員の異動も多く、従て會費徵收等の方法に付き益々困難を感じ居たる折柄、吉武氏を始め大阪在住者間に時々會員の會合あり、其間の連絡もよく整ひ居るを以て之を本會の分身として委員を設け、昭和三年十月より本會の事務上の後援を願ひ、阪神地方は勿論近畿中國四國方面在住者の會費徵收も同所にて取扱ふ事となした。

事務所

大阪市北區會根崎

大阪時事新報社

伊藤

巖

氣付

三田柔友會關西支部

○十月卅一日慶應俱樂部に於て開催。委員の外先輩吉武氏、現部員岩崎、五島、桐山氏も出席左の件につき協議す。

一、慶早柔道試合に對する審判員の件

一、慶早試合に對する合宿及其經費負擔の件

一、山下舊師範を柔道部の名譽教師とするの件

一、柔友會臨時會開催の件

一、慶早戰招待狀發送の件

一、中野助手負傷見舞金贈呈の件

○十一月八日午後六時より、築地賣家に於て、吉武吉雄氏東京本社へ榮轉につき其歡迎を兼ね、慶早戰對策懇談會を開催す。

出席者（順次不同）

青木會長、飯塚師範、中村、東野、峯岸、菅原（卓）、近岡、松本、飯塚、下川、塚本、吉武、鈴木（伊）、岡、佐野、宮永、松尾、野田、山本（誠）、太田、茂木（信）、島、三村、阿部（秀）、五島（次）、古賀、岩崎（三）、桐山、高松、葉山

三三 昭和四年史

(一) 寒 稽 古

一月十四日より二月三日迄三週間、毎朝四時より例年の如く綱町道場に於て寒稽古を行ふ。尙本年は五島次雄君寒稽古を十年間精勤して、柔道部に盡したる功顯著なるを以つて、特に三田柔友會より記念品を贈られた。

(二) 卒業生送別紅白勝負

二月十日